

黙示録2章8－11節 「苦しみを受ける教会」

1A よみがえりの主 8

2A 苦しみを知る主 9

3A 一時的な試練 10

4A 第二の死からの守り 11

本文

黙示録2章を開いてください。私たちの学びは、8-11 節、アジアの七つの教会のうち、二つ目の教会、スミルナにある教会に対するイエス様のことばを見ます。

⁸ また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。『初めであり終わりである方、死んでよみがえられた方が、こう言われる——。⁹ わたしは、あなたの苦難と貧しさを知っている。だが、あなたは富んでいるのだ。ユダヤ人だと自称しているが実はそうでない者たち、サタンの会衆である者たちから、ののしられていることも、わたしは知っている。¹⁰ あなたが受けようとしている苦しみを、何も恐れることはない。見よ。悪魔は試すために、あなたがたのうちのだれかを牢に投げ込もうとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあう。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。¹¹ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によって害を受けることはない。』

スミルナという町について紹介したいと思います。一つ目のエペソの北 55 キロ程にある、同じく地中海に面する湾岸都市です。現代のトルコで「イズミル」という名で、イスタンブール、アンカラに次いで 20 万人を有する第三の都市になっています。当時は、ローマの中で「アジアの美」とか「命と力の町」とか言われました。その町の美しさは、ローマ中に知られていたようです。今でもエーゲ海を眺める、今でも美しい観光都市です。

スミルナの歴史は、「滅ぼされ、また生き返す」というのが特徴になっています。そこはリュディアに紀元前 627 年に滅ぼされ、三世紀の間、ただの村でありました。けれども、ギリシアのアレクサンドロス大王がここに来て、再建することに決めたのです。それで、「一度は死んでいたけれども、甦った」という誇りを持っています。そこでイエス様は、ここにある教会の聖徒たちに、「わたしが、初めであり、終わりである。死んで、また生きたのだ。」と言われたのです。主イエスこそが、死んだけれども甦られた方なのだ、と励まされました。

そして、スミルナは、ギリシアのセレウコス朝との戦いでローマと連合しました。その辺りからローマに対する忠誠を誓っています。紀元前 195 年には、ローマの女神の座を造り、紀元 26 年に

皇帝ディベリウスのために神殿を建てました。次のペルガモンが初めにローマからの特権を得て、スミルナは二番目であります。ですから、スミルナに生きるキリスト者は皇帝礼拝の圧迫の中で生きようになります。これが、このイエス様の言葉の背景です。皇帝礼拝は、ローマ帝国が非常に大きいので、皇帝を神格化させることによって、一つの宗教を造り、それで国民を統合させていたのです。ですから、純粋な宗教心よりも、国に対する忠誠を示すためのものでした。年に一度、皇帝の像に焼香をして、「カエサルは主です」と言えばよいのです。けれども、キリスト者は、「イエスが主です」と告白し、カエサルは主であるということを拒みました。それで、非国民ということで激しい迫害を受けることになります。

「スミルナ」という町の名前は、「没薬」から来ています。スミルナは通商の要所であり、エジプトへ数多くの没薬も輸出していたのではないかと思います。そこで没薬は、ミイラのために使われていました。遺体の埋葬のために使われていました。そこで、キリスト者たちはイエス様のことを思っていたことでしょう。イエス様が生まれた時に、東方からの賢者は、黄金と乳香、そして没薬を捧げました。そして、イエス様が葬られる時にニコデモが、30^{キロ}もの没薬を持ってきたのです(ヨハネ 19:39)。キリストが死なれたところにこそ、没薬のような香りを放つことを彼らは思っていたことでしょう。そして彼ら自身が今度は、キリストに従う者たちとして、その信仰のゆえに殉教します。その殉教にも、キリストの香りが放たれているのです。

1A よみがえりの主 8

⁸ また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。『初めであり終わりである方、死んでよみがえられた方が、こう言われる——。

私たちが、エペソにある教会に対するイエス様のことばで見たように、イエス様は初めに、ご自身の姿を示されます。それは、1章にヨハネに現れた栄光の姿であり、その一部を現しておられます。それぞれの教会に関連するお姿です。

ここでは、「初めであり、終わりである方」であられます。時の初めから終わりまで支配しておられる方です。どんな迫害や困難を受けようとも、主の教会には、全ての支配者がおられます。この方が私たちに勝利を与えてくださいます。苦しみにあっても、迫害者がいても、主イエスがそのすべてを手中に収めておられて、支配しておられるということです。私たちは、苦しみの中にいたら、どうしても思いが乱れ、物事は混乱していると思ってしまいます。けれども、主が見ておられます。決して耐え難い試練は耐え得られないのです。

そして、「死んでよみがえられた方」として語られます。ヨハネに対して、主はこう言われていましたね。「1:18 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とよみの鍵を持っている。」彼らは、これから苦しみを受け、死ななければいけない状況にいます。し

かし、主がご自身が死んでもよみがえられたように、彼らにもよみがえりの希望があります。教会は、死によって敗北する存在ではありません。イエス様は、「マタ 16:18 わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」と言われました。

2A 苦しみを知る主 9

^{9a} わたしは、あなたの苦難と貧しさを知っている。だが、あなたは富んでいるのだ。

主は、ご自身の栄光の姿を示されてから、「知っている」と言われて、評価されます。エペソにある教会に対しては、忍耐と労苦を知っているとされていましたね。私たちはだれに見られていなくとも、よみがえりの主が見てくださっているのです。スミルナにある教会に対しては、「苦難と貧しさを知っている」と言われています。

ここでの貧しさは、ギリシア語では極貧を意味する言葉だそうです。非常に美しい町、スミルナでなぜ彼らが極貧の生活になっていたのでしょうか？苦難と貧しさとあるように、これは信仰のゆえに、迫害されて貧しくなっているということでもあります。キリスト者であるということで、社会的に受け入れられず、働くこともままならなくなっていました。黙示 13 章で、獣の像を拝まない者は、売り買いが許されないことが書かれていますね。皇帝の像を拝まないの、市場での売り買いが許されなかったのです。また、財産が没収されていたのかもしれませんが。ヘブル人への手紙にも、迫害の中で財産が取られることが書かれています。「ヘブル 10:34 あなたがたは、牢につながれている人々と苦しみをともにし、また、自分たちにはもっとすぐれた、いつまでも残る財産があることを知っていたので、自分の財産が奪われても、それを喜んで受け入れました。」

私たちは、物理的な迫害は今のところ少ないですが、日曜日も仕事をする機会があっても、礼拝を献げるために、それも犠牲にすることがあるでしょう。また、会社の中でキリスト者としてできないことをしないと告げることによって、不利になることもあるかもしれません。

しかし、驚くべき言葉があります。「だが、あなたは富んでいるのだ」であります。イエス様を信じて生きていくということは、このようなどんでん返しのような世界の見方をしていくことでもあります。主は、七つの教会の最後、ラオディキアの教会に対してはその反対の事を言われます。「3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっている。」何をもって、貧しいのか、富んでいるのかというと、それは信仰においてそうであると、ヤコブは手紙の中で言いました。「2:5 私の愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束された御国を受け継ぐ者とされたではありませんか。」イエス様は、「ルカ 6:20 貧しい人たちは幸いです。神の国はあなたがたのものだからです。」と言われました。

^{9b} ユダヤ人だと自称しているが実はそうでない者たち、サタンの会衆である者たちから、ののしられていることも、わたしは知っている。

迫害は、皇帝礼拝を拒むことによって起こっていましたが、追い打ちをかけるように、不信者のユダヤ人たちからも加えられていました。ここで、「ユダヤ人だと自称しているが実はそうでない者たち」と言われていますが、パウロがローマ人への手紙 2 章で、このように説明しました。「2:28-29 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、外見上のからだの割礼が割礼ではないからです。29 かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による心の割礼こそ割礼だからです。その人への称賛は人からではなく、神から来ます。」ユダヤ人という呼び名そのものが、主をほめたたえ、主を信じて、主との契約を持っているということなのですが、そうではないことを今、彼らは行なっているのです。神のものとされたキリスト者を迫害しているのですから。

そして、「サタンの会衆である者たち」と言われています。イエス様に殺意を抱いていたユダヤ人たちがいて、彼らは「私たちの父はアブラハムです」と言っていますが、イエス様は、「ヨハネ 8:44 あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。彼のうちには真理がないからです。悪魔は、偽りを言うとき、自分の本性から話します。なぜなら彼は偽り者、また偽りの父だからです。」血縁関係がどんなにユダヤ人であろうとも、霊の戦いというのは生々しく、現実のものとして存在していて、サタンがキリスト、またキリストに属している者を憎ませることをしている、ということでもあります。そして使徒ヨハネは、はっきりとキリスト教会の中でも、同じことが言えることを話しました。「1ヨハネ 3:10 このことによって、神の子どもと悪魔の子どもの区別がはっきりします。義を行わない者はだれであれ、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」ですから、私たちがどのような霊の戦いにいるか知らないといけません。兄弟を愛さないこと、憎んでいるということは、どこから来ているのか？ということなのです。悪魔から来ています。

どうしてユダヤ人がそんなに、キリスト者を迫害するようになったのか？実は、複雑な事情があります。彼らもまた、実はローマから迫害の対象になっていました。ローマの植民都市ピリピでは、パウロがむち打たれましたが、それは彼がキリスト者というよりも、ユダヤ人だからでした（使徒 16:20）。そして、アクラとプリスキラは、パウロにコリントで会いましたが、彼らは皇帝クラウディウスによってユダヤ人がローマから追放されていたからです。多神教の中で、異教社会の中で、ユダヤ人は迫害の対象にされていたのです。けれども、スミルナにおいては、早くからユダヤ人共同体ができていて、彼らがローマの役人たちにも声を出すことのできるほどの影響力を持っていました。そして興味深いことに、今のトルコのイズミルには、シナゴークがいくつか残っています。

彼らは、ローマによって迫害されているキリスト者と、自分たちが一緒にされることを殊更に恐れたのです。自分たちの特権が脅かされると思ったのです。それで、元々はユダヤ教の一派であ

った教会を、自分たちから切り離すことによって、自分たちを生かしたのです。かつてのユダヤ人宗教指導者も、同じような恐れをイエス様に対して持っていました。「ヨハネ 11:48 あの者をこのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。そうなると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう。」自分たちの既成の体制が、イエスというものによって壊されて、ローマが自分たちの土地も国民も奪い取ることになる、ということをおそれました。

このように、迫害というのは純粹に外部からではなく、内部からも来るとことを知る必要があります。世の迫害を免れるために、世と一つになるという生き残りを内部の者がするのです。すると、内部の者が迫害を始めるのです。同じ一神教であるがゆえに迫害や圧迫を受けていたユダヤ教の共同体がそうであったように、迫害は想像以上に複雑です。

そして、ここに「**ののしられている**」いとあります。ローマ支配下のキリスト者は、何かにつけ事実無根の中傷を受けていました。具体的には、こんなものです。彼らは、聖餐式を守っていました。裂かれたパンはキリストの体を表し、ぶどう酒の杯はキリストの流された血を表していましたが、「彼らは宗教儀式の中で人食いをしている。」と中傷しました。そして兄弟と互いに教会で呼び合っていました。それで、「彼らは家族制度に反対している。」と中傷しました。ローマでは家族単位は重んじられていたので、そう言われたのです。そして、地震や災害が起こると、神々がそれらを引き起こしたと彼らはみなします。そこで、神々を怒らせたのはだれか？ そうだ、拝まなかったキリスト者のせいだ！ となるのです。

3A 一時的な試練 10

¹⁰ あなたが受けようとしている苦しみを、何も恐れることはない。見よ。悪魔は試すために、あなたがたのうちのだれかを牢に投げ込もうとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあう。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。

彼らの中で物理的に投獄される者たちが出てきます。おそらくは、その美しい街並みの中に、地下牢があって、そこに排斥物が溜められているようなところに押し込められたのかもしれませんが。そして餓死、あるいは処刑されて、殺されることとなります。また、競技場に連れて行かれたかもしれませんが。そこに野獣が解き放され、生きたまま喰い殺されたかもしれません。あるいは、杭に縛られて、火あぶりに刑に遭ったかもしれません。このような恐怖が彼らを襲いかかりました。

しかし主は言われました。「あなたが受けようとしている苦しみを、何も恐れることはない。」なぜなら、死で私たちは終わるのではなく、死んでも生き返るからです。肉体の死を恐れる必要のないことを、イエス様が弟子たちに教えられました。「ルカ 12:4-7 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならぬ方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持って

おられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。6 五羽の雀が、ニアサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません。7 それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があるのです。」

迫害、また拷問のような苦しみを受ける時に、その恐れに打ち勝つのは、主への恐れです。その苦しみは一時的なものであり、死んだ後の魂に対して指一本触れることはできませんが、主ご自身は死後にゲヘナに投げ込むことができるのです。ですから主を恐れる時に人を恐れません。主は頭の毛さえも数えておられるほど、私たちのことを覚えておられます。私たちの住んでいる日本社会は、霊的には「恐れ」によって成り立っている社会です。自分が何かをしたら村八分にされる、ということを心底信じている社会です。ですから、これはとても切実な戦いです。人を恐れるのではなく主を恐れます。

そしてこのことをする者たちの背後には、悪魔がいます。「悪魔は試すために」とありますね。迫害や反対の背後には悪魔がいます。それで悪魔に立ち向かうのです。「1ペテロ 5:8-9 身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、吼えたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。9 堅く信仰に立って、この悪魔に対抗しなさい。ご存じのように、世界中で、あなたがたの兄弟たちが同じ苦難を通してきているのです。」そして、「あなたがたは十日の間、苦難にあう。」と主は言われますが、これは苦しみが長くは続かない、あなたの信仰が試されるのは一時期だけなのだということです。ダニエルが王の食べるごちそうの肉を避け、十日間私たちが試してくださいと願いましたね(1章)。それと同じ使われ方をしています。

それから、「死に至るまで忠実でありなさい。」と言われます。イエス様は「確かな証人(1:5)」あるいは「忠実な証人」と呼ばれました。証人という言葉には、殉教するという意味合いが含まれることを以前学びました。イエスを主として生きるということには、自分が死ぬかもしれないという使命を帯びていると言っても過言ではありません。私たちは主のために死ぬ用意ができていますか？その心の用意があつてこそ、キリストが私たちの内に生きてくださいます。

そして大事なのはイエス様の約束です。「わたしはあなたにいのちの冠を与える。」主は、最後まで忠実な者に冠を用意しておられます。テモテ第二4章には、パウロがネロによって死刑にされる直前に、義の冠が待っていることを話しました。ここでは、「いのちの冠」です。主のために死ぬのであれば、命の冠を受け取ります。「ヤコブ 1:12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いた人は、神を愛する者たちに約束された、いのちの冠を受けるからです。」当時、ローマでは競技で優勝した人は、総督などローマの役人から、月桂樹のできた冠をかぶせてもらいました。キリストにあつて最後まで走りぬいた人には、キリストご自身が、月桂樹のような朽ちる冠ではなく、朽ちない冠をもって報いてくださるのです。スマルナの人は、信仰のゆえに死ぬのですが、しかし、いのち

をもって報いを受けるということです。

4A 第二の死からの守り 11

¹¹ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によって害を受けることはない。』

主が、スミルナのみならず、すべての教会に語られている呼びかけです。ここで主の勝利者への約束は、「第二の死によって害を受けることはない」であります。勝利者への約束は、黙示録 20 章と 21 章に書かれていることであり、第一の死は肉体の死ですが、永遠に神から引き離されている苦しみが第二の死であります。「20:13-14 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。14 それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。」恐れなければいけないのは、肉体の死ではなく、この第二の死ですね。

スミルナの町の歴史に戻りましょう。スミルナには、パゴス山というアクロポリス、ギリシア式の要塞があります。海辺からパゴス山までには、「黄金通り」という有名な街路がありました。スミルナの町では一回に、1500 人が殉教したと言われ、その山の上でさらに 800 人が殉教したと言われています。

そしてスミルナからは、ヨハネの弟子ポリュカルポスという教会の監督がいました。紀元後 65 年から 155 年まで生きていました。幼い時からキリスト者の家に育ち、そして教会の監督に任命されました。彼は聖書を教え、異端論駁もしていきました。そしてピリピにある教会には、「徳を重んじ善を行う生活をし、キリストにある信仰によって救われたのだから、万一、死ぬような事があっても信仰を捨ててはならない。」と勧めました。ある時に、夢を見て自分の枕に火が付いていました。それで友人に、「私が杭に打たれて、火あぶりになるのは近い。」と漏らしました。案の定、ローマ地方総督の命令で、彼を捕縛するべく兵士たちがやってきたのです。彼は、少しも恐れず、兵士たちに挨拶をして、なんと、食事を出すように言いつけ、もてなしたのです。そして「一時間ほど祈らせてください。」と頼みました。彼は、祈っているうちに喜びにあふれ、熱く聖霊に満たされ、イエス・キリストの救いを語りました。兵士たちは、「こんな善良なおじいさんをどうして捕えるのか。」と恐れを抱いたそうです。

けれども命令ですから従わないといけません。兵士たちが命令違反したら罰せられますから、ポリュカルポスは逆にすぐに地方総督のところ連れて行くように促しました。そしてローマの役人たちは、「どうか、あなたを殺したくないから、信仰を捨ててくれ。」と頼みましたが、彼は頑なに拒みしました。せつかくの善意を断ったので、怒って、死刑台に引きだしたのです。

そして有名な言葉があります。執行官が最後の機会を与えました、「キリストを呪いなさい。そうすればあなたの命は助かる。」すると彼は言いました。「私は 86 年間、キリストに従い続けてきましたが、キリストは、その間ただの一度も私に不幸をお与えにならず、恵みのみを与えてくださいました。こんなにまで私を愛してくださるお方を、どうして呪う事ができましょう。」そして火で焼かれることについて、こう言いました。「どうして、私の王であり救い主を呪えましょう。あなたは、つかの間に燃える火によって私を脅していますが、少し経てばこの火は消えます。あなたが知らないのは、悪者のために用意されている永遠の火の罰なのです。」そうです、まさにイエス様が仰っている、第二の死のことを話したのです。それで執行官は怒り、彼を杭に付けました。普通、釘で打ち付けるのですが、ポリュカルポスは「そんな必要はない。私は動かない、手だけを縛りなさい。」と言いました。執行官は、火をつけたのですが、なんとアーチ形のようになって火が回りによけて、彼の体に火が付かなかったのです！執行官はやむなく兵士に命じて、彼の脇腹を槍で付かせました。そして彼は死に、炎の中で焼き尽くされました。¹

初代教会は、このようにしてローマ帝国の中で迫害を受けていきました。初めに起こった本格的な迫害は、パウロ自身も殉教したネロによる迫害です。そしてヨハネが迫害を受けていた、皇帝ドミティアヌスによるものがありました。それから散発的に迫害はありましたが、帝国が衰退していた時に、強い君主政治が必要だと考えました。けれども、皇帝礼拝に基づく国教にキリスト者は屈しないであろうことを知っていたディオクレティアヌスは、303 年にキリスト者への積極的な迫害を求める勅令を出したのです。当時、キリスト者の数は 5 千万から 7 千 5 百万と言われ、総人口の 15%にも達していました。教会が集まることを禁じ、聖書は焼き捨てられ、財産は没収されました。異教の神にいけにえを捧げることも強要されます。牢獄にはキリスト者があふれかえって、犯罪人を入れる余地がなかったと言われていています。あのローマにあるコロシウムは、剣闘士がどちらかが死ぬまで戦うエンターテイメントですが、ライオンが連れて来られて、そこにキリスト者が連れて来られて、生きたまま喰い殺されるのを見て、楽しんでいました。

けれどもキリスト者は、生き延びました。カタコンベと呼ばれる地下洞窟で礼拝を捧げ、絶滅することはなく、むしろ広がっていったのです。そして 313 年に、自らキリスト者となった皇帝コンスタンチヌスがミラノ勅令を出して、キリスト教を公に認めたのです。

160 年辺りから 220 年辺りまで生きた、テルトゥリアヌスというキリスト教神学者がいました。彼の残した有名な言葉が、「殉教者の血は教会の種」というものです。イエス様は、スミルナの教会に対して何一つ叱責する言葉を残しておられません。なぜなら、テルトゥリアヌスのいうように、迫害は教会を清めるだけだからです。清められた教会には聖霊が働きます。それで拡大するのです。試練を受けている時は、そういった意味で喜びとみなすのです。主が清められるだけだからです。

¹ <http://ameblo.jp/1tubunomugi100tubu/entry-10770910857.html>